

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

カディジャ・エル・ベナウイ パブリック・トーク

2012年9月5日(水) 19:00-21:30

スピーカー カディジャ・エル・ベナウイ

【はじめに】

本日はアラブ圏における舞台芸術の概要のパブリック・トークにお越しくださいまして、ありがとうございます。私にとりまして初めてのアジア訪問、そして初来日の機会を実現させてくれたセゾン文化財団にお礼申し上げます。芸術関係の一専門家としてこうして来日し、国や文化について皆様にお話しできることは、私にとりまして格別の喜びです。

【自己紹介】

これからお話ししますアラブ圏の舞台芸術界の概要にも関連いたしますので、まず私のバックグラウンドについて少し触れたいと思います。

私はモロッコの南にある、観光と漁業が盛んなアガディールで生まれ育ちました。アガディールは、漁業協定を通じて日本とも密接な関係にあります。また、世界最大のベルベル語話者の人口を有する都市です。ベルベルというのは、アラブ・イスラム系民族によって征服される前の北アフリカ元来の文化・言語です。この場合の「北アフリカ」は、西はカナリア諸島から東はエジプトまで、北は地中海沿岸から南はサハラ砂漠までを指します。

私はベルベル人であり、母語はベルベル語です。モロッコの公用語であるアラビア語も話します。なお、2011年の「アラブの春」のお陰で、ベルベル語もモロッコの公用語に認められました。

また、モロッコの社会および経済活動の実質的な公用語であるフランス語は子供の頃から習いました。フランスは約50年もの間モロッコの宗主国だったため、いまでもモロッコにとって最重要国であり、わが国への最大の投資国でもあります。こうした背景は、後ほどお話しします芸術界にも影響を及ぼしています。

大学卒業後、私はパリに渡り、ヨーロッパの文化政策について学ぶと同時に、＜欧州文化財団＞などのアラブ圏と関係のある国際機関でも働きました。

私は2005年から＜アラブ若手演劇基金（Young Arab Theatre Fund、略称 YATF）＞で働いています。同基金は、アラブの芸術家たちがベルギーのブリュッセルに設立した、アラブ圏におけるコンテンポラリーアートへの支援と文化交流の振興を目的とする団体です。私はここで、芸術家や文化関係者によるアフリカへの渡航を促進する基金＜アート・ムーヴズ・アフリカ（Art Moves Africa）＞の立ち上げとその運営、および民間のインディペンデントな文化施設で構成される＜インフォーマル・ミーティング（Informal Meeting）＞とい

う会議の運営を任されています。仕事の内容はアラブ圏内だけでなく、アフリカと中東全般にわたります。

【「アラブ圏」の定義】

以上が私のバックグラウンドですが、次にアラブ圏についてご説明したいと思います。なお、アラブ圏の歴史や政治はかなり複雑で多様で、この時間内にその全体像をお話するのは難しいため、コンテンポラリーアートに関係する部分に絞ってお話しします。

「アラブ圏」の定義ですが、地理的には北アフリカから中東を経て、アラビア半島までの国々を指します。具体的にはモロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビア、エジプト、ヨルダン、パレスチナ、レバノン、シリア、イラク、サウジアラビア、イエメン、オマーン、アラブ首長国連邦、カタール、バーレーン、クウェートが含まれます。

しかしもう一方では、アラビア語を使用する、サハラ砂漠以南のアフリカの国々を加える場合もあります。モーリタニアやスーダン（現在では南北で分離していますが）、ソマリアとソマリランド、そしてモロッコ政府が分離独立を承認していない西サハラです（モロッコ政府は西サハラの自治権は認めています、その領有権をモロッコの君主制の下に置くべきだと主張しています）。

本日のパブリック・トークでは、アラブ圏のコンテンポラリーアートや舞台芸術の代表的な国であるモロッコとアルジェリア、チュニジア、エジプト、パレスチナ、レバノン、シリア、ヨルダンなどについてお話しします。

【アラブ圏の歴史】

いま申し上げました国々は、アラビア半島の南から攻めてきたアラブ人に侵略され、彼らの支配下に置かれている間にアラビア語とイスラム教が普及しました。

19世紀の終わりから20世紀初頭になると、いずれの国も植民地化されました。フランスの領土となった部分はマグリブ地域と呼ばれ、モロッコ、アルジェリア、チュニジアが含まれます。マグリブとは「陽の沈む地」という意味です。一方「陽の昇る地」を意味するマシュリク地域には、イギリスの植民地だったエジプト、ヨルダン、パレスチナや、フランスの植民地だったシリアとレバノンといった中東諸国があります。

近代化という概念が広がるにつれ、両地域の間隔が生じるようになりました。マグリブの国はフランスの、一方マシュリクの国は主にアングロサクソンの影響下で近代化が進みました。言語的にも、マグリブはフランス語圏に、マシュリク／中東地域は主に英語圏です。さらに、両地域の間には地理的な距離感もあり、移動の際には航空運賃も高くなります。

とはいえ、アラビア語と共通の歴史、そしてイスラム教によって、両地域が強く結ばれていることも確かです。

【アラブ圏の文化ネットワークについて】

アラブ圏には様々な文化ネットワークがありますが、この地域の文化ネットワークは、例えばサハラ砂漠以南のアフリカ諸国間や、南米諸国間における、いわゆる「南」のネットワークに似ていると思います。

アラブ圏での文化ネットワークは4つの層から成り立っています。

第1の層は、政府などによる公式なネットワークです。この場合、各国政府の宣伝に便利である“無難”な芸術の振興が行われます。

次の層は、アラブのポピュラー音楽や、インドのボリウッド映画に似たメロドラマに代表される商業的ネットワークです。

第3の層は、「外交的ネットワーク」と言われるものです。フランスの<アンスティチュ・フランセ>やイギリスの<ブリティッシュ・カウンシル>、ドイツの<ゲーテ・インスティトゥート>、スペインの<セルバンテス文化センター>など、ヨーロッパ諸国の文化団体によって主に運営されているネットワークです。このネットワークによる芸術プロジェクトでは、各国のイデオロギーが反映されることがやや多いように見受けられます。つまり、ヨーロッパ諸国の政治的・戦略的な目的で支援が行われることがあります。

4つ目の層は、今夜のパブリック・トークの核心とも言える、芸術家などが各地に設立した団体で構成されるインディペンデントなネットワークです。このネットワークと、上述のヨーロッパの文化団体による「外交的ネットワーク」の2つが、アラブ圏内のコンテンポラリーアートを支えています。このようなインディペンデントなネットワークは、約15年前から存在しています。現在のところ参加団体の数はまだ少なく、例えば先述の<アラブ若手演劇基金(以下 YATF)>や<アル・マウリド・アル・タクフィ文化資源 (Al Mawred Al Thaqqfy Culture Resource)>、<アラブ芸術文化基金 (Arab Fund for Arts and Culture)>、さらにアフリカ大陸を対象とする<アート・ムーヴズ・アフリカ>などが挙げられます。各団体の目的は、芸術家が自分の好きなように創作活動に打ち込める環境を提供することと、自国の政治や社会に対する批判的な問題意識を表現できる場を提供することです。

【アラブ若手演劇基金(YATF)について】

YATFは、次の3つの助成プログラムを通じて、北アフリカと中東地域における現代的なパフォーマンス・アーツを支援しています：

- ① 若手芸術家による創造活動への支援プログラム
- ② アラブ圏内でのツアー（巡業）への支援プログラム
- ③ インディペンデントな文化施設（空間）への支援プログラム

YATFでは、上記助成プログラム以外に、さらに2つのメカニズムを用意しています。

ひとつは<ミーティング・ポイント (Meeting Points)>と呼ばれる、アラブ圏の旬の舞台芸術を紹介する国際的なマルチジャンルのフェスティバルです。第5回のフェスティバルでは、ベルギーの著名なキュレーターであるフリー・レイセン氏がキュレーションを行

いました。続く第6回では、ナイジェリア出身のアメリカ人であり、同様に著名なオクウィ・エンウェゾー氏が芸術監督を務めました。このフェスティバルを通じて、YATFは基金の哲学とビジョンを提示し、アラブ圏内での交流のひとつの在り方を提案しています。

もうひとつのメカニズムは、先程申し上げました<インフォーマル・ミーティング>という、アラブ圏内のインディペンデントな文化施設によって構成される会議体です。会議は2年に一回開催され、各文化施設のプログラム担当者間のネットワークの充実化と、プログラムの相互交流を目的としています。

【アート・ムーヴズ・アフリカについて】

また、外に対して開かれた活動を促進するために、YATFでは芸術関係者によるアフリカ大陸への、およびアフリカ大陸間での渡航・移動を対象とする<アート・ムーヴズ・アフリカ>という基金を設立しました。北アフリカ諸国とサハラ以南のアフリカ大陸を一体として捉える、それまであまりなかった視点を取り入れた基金です。

基金の設立から2～3年の間に、資金の提供だけでなく、情報の交流も必要であることが明らかになりました。そこで、アフリカ大陸の各芸術文化担当者が互い情報を共有できる独自のデータベースをインターネットに立ち上げました。ここでは、各担当者が自分自身のデータをアップロードできますし、誰でもアフリカのコンテンポラリーアートについて検索できます。

2010年からは調査研究プログラムも開始しました。ヨーロッパやアメリカへの渡航・移動に関するデータはかなりありますが、アフリカ大陸やアラブ圏については情報が限られています。そこで私たちは、自ら情報を収集し、データベース化するために、芸術家や専門家に調査研究を委託する事業を始めたのです。

最初の研究テーマは「東アフリカ地域の舞台芸術界に関する渡航とツアー」でした。私たちは毎年助成プログラムの数字と評価のデータを公表していますが、その結果、西アフリカなどでは舞台芸術家による渡航・移動が非常にダイナミックで活発であるのに対し、東アフリカでは動きが少ないことが判明しました。

この調査研究の内容は、東アフリカの芸術家が新規プロジェクトを開始する際に役立っています。実際その後、音楽関係者によるネットワーク<Music On The Move>が組織され、それと同じ頃にダンス関係者が、移動費の負担軽減のひとつの解決策としてフェスティバルを始めました。さらに最近では、舞台芸術の見本市も開催されています。

今回の調査研究内容をまとめた報告書は、東アフリカにおける渡航・移動の問題や障害を明らかにしつつ、今後の可能性を提示する、興味深いものとなりました。

【YATFによるその他の活動(空間への支援、刊行物)】

アラブ圏では、活動やプロジェクトに対する支援が一般的で、空間への支援はYATFによるプログラムが唯一です。YATFによる空間支援は、財政的なものだけでなく、情報提供

や、場を活性化する機会の提供といった方法でも行われています。先述の〈インフォーマル・ミーティング〉が2年に一回開催されるのも、空間支援のひとつの形です。

また2009年からはアラブ圏内の文化施設の総合一覧を刊行しています。情報は定期的に更新され、最新版は2011年に出版されました。一覧には、各文化施設の開催事業から、建物や舞台の寸法といったデータまでを網羅しています。元々はアラブ圏内の施設のために刊行されましたが、いまでは圏外の芸術家や制作者も参考にしています。

【アラブ圏内のフェスティバルについて ①音楽】

次にアラブ圏内のフェスティバルについてお話ししたいと思います。ここでは YATF が支援しているフェスティバルだけでなく、それ以外にもアラブ圏で意欲的に活動し、各国や各分野を代表しているものをご紹介します。

まず音楽のフェスティバルからご説明します。最初の例として、モロッコのカサブランカで開催されている、北アフリカの代表的なアーバン・ミュージックの音楽祭〈ブルヴァール (Boulevard) 〉を取り上げたいと思います。

モロッコでは毎年数多くのフェスティバルが行われていますが、そのほとんどがワールドミュージック系のもので、政府や企業が主催しています。それに対して〈ブルヴァール〉は、あらゆるジャンルを対象とする民間のインディペンデントなフェスティバルで、若手による、若手のための発表の場となっています。

〈ブルヴァール〉は当初、保守派やイスラム教原理主義者から、若者の西洋化を助長させるものだと糾弾され、フェスティバルに参加していたメタルバンドのメンバー数人が悪魔崇拝を奨励しているとの理由で刑務所に入れられる事態にまで発展しました。ところが、彼らが逮捕された2003年に、若い過激派による爆破テロ事件がカサブランカで起きました。皮肉にもこのテロ事件をきっかけに、若者の自己表現の手段として、芸術活動がいかに重要であるかが一般大衆にも認知されるようになりました。〈ブルヴァール〉に対するモロッコ社会の眼差しは大きく変わり、アーバン・ミュージックが非行や犯罪につながるものではないと理解されるようになりました。こうして奇しくも〈ブルヴァール〉は追い風を受け、いまでは若いミュージシャンがプロに転向するきっかけになっています。

それではここで、〈ブルヴァール〉で実際演奏されている音楽を映像と一緒に聴きいただければと思います。[同フェスティバルでの演奏記録のビデオを会場のスクリーンに上映]

〈ブルヴァール〉は、モロッコのみならず、世界にも開かれており、モロッコと海外の音楽家による交流やレジデンシーが行われています。また、政府や企業主催のフェスティバルが毎年国際的なスターを呼び寄せて、多額の資金をつぎ込みながらも短期間で終わってしまうのに対し、〈ブルヴァール〉は一年中行われています。若手演奏家のためのワークショップが開催され、また練習場もあります。最近ではアラブ圏で最初かつ最大のアーバン・ミュージックのセンター〈ブルテック (Boultek) 〉をオープンしました。

なお、マグリブで人気のある音楽は、伝統音楽、フュージョン、そしてヒップホップです。アラブ圏のヒップホップはアルジェリアとモロッコから始まったと言われていますが、それは両国が旧宗主国であるフランスの影響を強く受け、フランスのヒップホップがマグリブに流入してきたからではないかと考えられます。つまりマグリブのヒップホップ文化は、アメリカから直接影響された訳ではなく、フランスを経由して根付いたのです。

マグリブのアーバン・ミュージックシーンが地域の伝統的な要素を取り入れているのに対し、マシュリクのアーバン・ミュージックはかなり実験的だと言えます。それを代表しているのが、エジプトとレバノンの音楽祭です。

<ワンハンドレッド・コピーズ (100 Copies)>という、カイロのミュージシャンであるマハムド・リファトが設立したレーベルがありますが、このレーベルは、エジプト国内外の実験音楽を紹介しつつ、毎年同名のフェスティバルを開催しています。確か先月 [2012年 8月] には練習および演奏会用のスペースを開いたばかりです。<ワンハンドレッド・コピーズ>で扱っている音楽を聴いてみましょう [パソコンでネットラジオからの音源を流す]。残念ながらいま流れているのは、あまり実験的な音楽とは言えませんが (笑)、リンク [<http://www.100radiostation.com/>] をお知らせしますので、お時間のある時にアラブ圏の実験的音楽をお聴きいただければと思います。

もうひとつご紹介したいのは、レバノンのベイルートで行われている、<ワンハンドレッド・コピーズ>よりももっと実験的な<イルティジャル (Irtijal)>というフェスティバルです。「イルティジャル」はアラビア語で「即興」を意味します。このフェスティバルの実行委員会でもレーベルを立ち上げ、レバノンの無名の実験音楽家を紹介しています。

なお、今回いろいろと調べているうちに、<イルティジャル>を立ち上げたミュージシャンの一人であるラエド・ヤッシン氏が、日本とスイスのミュージシャンと一緒に<プレアエド (Praed)>というプロジェクトをやっていることが分かりました。彼らは『Made In Japan』というアルバムを発表したばかりで、今年 [2012年] の10月に来日ツアーを行うようです。では<プレアエド>の曲を聴いてみましょう [パソコンから音源を流す]。

いま説明しましたように、マグリブとマシュリクの音楽性はだいぶ異なります。とはいえ、両者による交流もあります。特にモロッコとエジプトのミュージシャンはよく一緒に仕事をしており、私自身、エジプトの<ワンハンドレッド・コピーズ>とモロッコのフェスティバルとの交流事業に度々関わったことがあります。

もちろん<ワンハンドレッド・コピーズ>と<イルティジャル>以外にも音楽祭はありますが、この2つのフェスティバルがそれぞれの地域に深く根ざし、地元のミュージシャンを支援しているという点において、代表的な成功例であることは間違いありません。

【アラブ圏内のフェスティバルについて ②ダンス】

ダンスではマグリブから2つ、マシュリクから1つ、計3つのフェスティバルをご紹介しますと思います。

まずマグリブには、モロッコのマラケシュで開催されている<オン・マルシュ (On Marche)>という、あるダンスカンパニーが始めたフェスティバルがあります。「オン・マルシュ」はフランス語で「われわれは歩く」という意味です。当初は<アンスティチュ・フランセ>のマラケシュ支部が全面的に支援していましたが、現在は独立して運営されています(いまま時折、在モロッコのフランス大使館から支援を受けていますが)。このフェスティバルは、アラブ圏のダンスフェスティバルの中では比較的新しいものですが、モロッコの振付家やダンサーにとって、作品発表の舞台となっていると同時に、彼らが海外のダンスを発見する良い機会にもなっています。ここで<オン・マルシュ>での上演作品の最新映像をご覧に入りたいと思います [会場のスクリーンにビデオを上映]。

このビデオではフランス語を使用していますが、今後同フェスティバルでは、コンテンポラリーダンスに対する地元の観客や支援者の意識を高め、なぜコンテンポラリーダンスなのか、なぜそれが重要なのかを、アラビア語やベルベル語で説得力を持って伝えることが大きな課題だと感じます。

そういう意味では、チュニジアのチュニスで開催されているフェスティバル<ダンスの春 (Printemps de la Danse)>は、観客の意識を高めるのに成功しています。その背景には、フェスティバルの実行委員会が、在チュニジアのフランス大使館やフランスの機関からの支援、および国際的な大企業からの協賛金を多く獲得しているという実績があります。その結果、コンテンポラリーダンスを大規模な劇場で上演することが可能となり、従って観客数も伸ばしています。<ダンスの春>はアラブ圏で最も古いコンテンポラリーダンスのフェスティバルであり、チュニジアのコンテンポラリーダンスの育成と振興に大きく貢献しています。その結果、チュニジアはアラブ圏で最高レベルのカンパニーをいくつも輩出しています。このフェスティバルからの映像もご覧いただきたいと思います [会場のスクリーンにビデオを上映]。

次にご紹介したいのは、マシュリクの複数のダンスフェスティバルで構成されるネットワーク<アラブ・ダンス・プラットフォーム (Arab Dance Platform)>です。これは<ベイルート国際ダンスプラットフォーム (略称 BIPOD)>から始まり、ヨーロッパやアメリカ、アジアなど世界のダンスカンパニーをアラブ圏に招聘することを目的に、複数のダンスフェスティバルがネットワークを組織して設立されました。各フェスティバルは交互に開催されますが、これによって海外からの渡航・移動費や出演料など経費負担の軽減が可能となっています。

このネットワークには、レバノンのベイルートの他、シリアのダマスカス、ヨルダンのアンマン、そしてパレスチナのラマラのダンスフェスティバルが参加しています。

【アラブ圏内のフェスティバルについて ③マルチジャンル】

これまでに音楽とダンスのフェスティバルについてお話ししましたが、次に舞台芸術の振興にも貢献しているマルチジャンルのフェスティバルをご紹介します。

マルチジャンルのフェスティバルのほとんどはビジュアルアート系のものとして始まり、次第にダンスや音楽を取り込むようになりました。そのうち最も古いのが、レバノンのベイルートで行われている<ホームワークス (Homeworks)>です。これは芸術家や知識人、哲学者、作家、思想家を迎え、お互いの作品について語り合うフォーラムと、展覧会や舞台公演が行われるフェスティバルです。

いままで湾岸地域について触れませんでしたでしたが、ここでアラブ首長国連邦に属するシャルジャ首長国の<シャルジャ・ビエンナーレ (Sharjah Biennale)>をご紹介しますと思います。実は、マグリブやマシュリクにいる関係者の多くは、湾岸諸国で行われている芸術活動に対しては懐疑的です。と申しますのは、湾岸諸国の人々はお金を持っていても、その使い道を知らず、芸術に目覚めても、ルーヴルやグッゲンハイムといった美術館のブランドを招致することで世界的な芸術拠点になろうと競い合っている印象が強く、その反面、創作活動は決して盛んだとは言えないからです。しかし、われわれも彼らをただ批判するのではなく、一緒に協力する用意はあります。なかでもシャルジャ首長国は良きパートナーです。この首長国はドバイとアブダビに挟まれています。両国が世界的なアートハブ国になろうと競い合っているのに対し、シャルジャはアラブ圏に目を向けています。その理由はおそらく同首長国が保守的だからではないかと思われます。ビエンナーレを設立した首長の娘は、自身も芸術家であり、シャルジャ芸術財団の理事長を務めています。同ビエンナーレは主にビジュアルアートのフェスティバルとして知られていますが、2009年からは舞台芸術にも門戸を開きました。2013年のビエンナーレには東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏をキュレーターに迎えています。長谷川氏が、アラブとアジアのアートを大きく取り上げ、人々が出会い、交流する場としてのアートというテーマでキュレーションを行っている点で、私はとても注目しています。

本日最後にご紹介したいのは、「アラブの春」において象徴的な都市となったチュニジアの首都・チュニスで行われている、アラブ圏内で最も新しいフェスティバルである<ドリームシティ (Dream City)>です。このフェスティバルは、チュニスの名高いコンテンポラリーダンスカンパニーを率いる若手振付家のセルマとソフィアヌ・ウィッシーという姉弟が2007年に開始しました。フェスティバルの目的は、キュレーターと芸術家とコンテンポラリー作品の三者による交差点の外に置かれがちなコミュニティと観客の視点からコンテ

ンポラリーアートを問うことにあります。

＜ドリームシティ＞の当初からのコンセプトは「都市をオキュパイ（占拠）する」ことです。ニューヨークのウォール街をはじめ、2011年に世界各地に広まったオキュパイ運動より何年も前からです。現在ではビエンナーレとして開催されていますが、本年[2012年]のテーマは「表現の自由」でした。まさしく表現の自由の問題に直面している現在のアラブ圏の芸術家たちにとって、極めて切実なテーマです。

【「アラブの春」以降の芸術界の状況について】

実は「アラブの春」以前と比べて、現在の方が芸術家にとって厳しい状況です。独裁政権が倒れた後の民主化による選挙の結果、イスラム教原理主義的な政党が力を握るようになり、彼らが最初に攻撃したのは、芸術家や表現の自由を求める人たちでした。「アラブの春」以降、芸術家たちは、表現の自由を自ら守る必要性、また地元のコミュニティと連帯しつつ、そのコミュニティを自分たちの創作活動に取り込む重要性を強く認識しています。

また、「アラブの春」以来、インターネットや「フェイスブック」などのソーシャルネットワークなどで発表される芸術作品の数が急増しました。人々は携帯電話を使ったり、街の壁などに絵を描いたりして、芸術と表現の力を発見したのです。現在進行形で新しい芸術形態が生まれており、プロの芸術家たちは、その表現力が試される重要な時期に差し掛かっていると思います。

こうした流れは肯定的に捉えることもできますが、マイナス面もあります。と申しますのは、海外のステークホルダーは、「アラブの春」に密接に関係している作品やプロジェクトに興味を抱くものの、それ以外の活動にはほとんど関心がないのです。これは海外からの助成金に大きく頼っているフェスティバルにとっては痛手です。

【おわりに】

長い時間ご静聴くださいまして、ありがとうございました。私は本日のパブリック・トークで、アラブ圏における舞台芸術やフェスティバルの概要についてお伝えしたつもりです。こうした点をお話ししたのは、セゾン文化財団からのフェロシップによる今回の来日中の調査テーマが、アラブ圏のフェスティバルと日本のコンテンポラリーな舞台芸術をいかに結ぶか、というものだからです。

アラブ圏の芸術における問題を深く掘り下げたり、具体的な問題を分析したりするようなことはしませんでした。もしご質問やご意見がございましたらぜひお寄せください。

(以下、質疑応答省略)